

ベン・ジョンソンのマスク研究(2)

—*The Masque of Queens* について

兵 頭 晴 子

(5)

「ベン・ジョンソンのマスク研究(1)」では、マスクの場の条件、満たすべき約束ごと、形態を確認した上で、初期の4つの作品を中心に、祭と比較したときの共通点と相違点、アンティマスクの萌芽的要素、登場人物、マスクと観客との関係、occasionalな意図の表わし方、戦いが行われたときの決着のつけ方、マスクの前半と後半のつなぎ方、展開のしかたなどについて検討した。Yale Ben Jonson, *The Complete Masques* におさめられた残り24篇についても、今後、順次同じ手順で検討を加えてゆく予定である。この作業を行っているうちに、新しい特徴、あるいは、いままでの枠組でとらえきれない部分が出てくることが予想される。そのときは、その事実に言及し、また、枠組を多少変更することもあり得る。今回は5番目のマスク、『女王のマスク』(*The Masque of Queens*)について考える。祭との比較、アンティマスク、テキストに現われた、作者とイニゴ・ジョーンズとの関係、ジョンソンの作劇上の態度が主な主題となる。

ダンスと歌が中心となるマスクに対して、ドラマの要素の強いアンティマスクの形が確立したのは、『女王のマスク』においてであるという意味においてもこのマスクの意義は深い。『女王のマスク』は、アン王妃の依頼により作られた。その折に、王妃はマスクの形式について、注文をつけたことが、作者の序文の中に記されている。

アン王妃は、スペクタクルにはバラエティーが必要だということを十分御存知なので、彼女の出演するマスクの前にマスクと似た形をとりつつ、マスクを対照的にきわだたせるような(a foil or false masque) ダンスかショーをつけ加えるように命じられた⁽¹⁴⁾。

また、その次に続けて、彼自身、その前年に書いた『ハディントン・マスク』で、少年たちにアンティマスクを演じさせて以来、同様の考えをあたためていたと書いている。そこで、このマスクの主題となる名声(good fame)の逆を表わすものとして、無知(Ignorance)、猜疑心(Suspicion)、信じやすさ(Credulity)などの役を魔女が演じる形式をとったという製作の経過を記している。これはマスクではなく、奇妙なスペクタクルを展開させる部分である。大筋は以下のとおりである。

場面は、地獄の入口。火が燃え上がっており、煙は天(天井)に達している。入口から魔女11人が次々に飛出す。香油壺を腰に下げたり、頭にねずみをのせていたり、手には紡ぎ棒、タンバリン、ガラガラなどを持って登場。騒々しい音をたてて、おかしな身振りをしてみせる。やがて魔女の集会の儀式どおりダンスを始める。そのうち、1人が長(Dame)のいないことに気づき、仲間とともに、まじないの文句を3つ(40行)となえる。文句は主として弱強4歩格(iambic tetrameter)の脚韻2行連句(rhymed couplet)ないしは1行おきに押韻する形式をとっている。頭韻(alliteration)もしきりに用いられており、全体として歌のように調子の良い韻文となっている。このまじないの

呼び声に応じて、長が登場。死人の腕で作ったたいまつを持ち、頭にはへびの頭髪をからませている。この長と他の11人の魔女との対話の中で、魔女たちの意図——今宵の輝かしいマスクをぶちこわしにきたこと——が観客に知らされる。そのために、魔女たちが持ちよったもの、たとえば、鳥が腐肉を食べていて、ちょうど嘴が南を向いたとき、その口の中からとり出した肉とか、狼の毛、狂犬の口から出た泡、赤ん坊を殺してとった脂肪、などのまじないの品を土に埋めながら、大地が震撼するようにと呪文をとなえる。やがて異様な音楽が鳴りはじめ魔女のダンス (magical dance) が始まる。すべてがさかさまだ。背中と背中、お尻とお尻を向け合って踊り、また、うしろ向きのまま手をつないで円形となって常とは逆の方向、つまり左まわりにまわりつつ、頭や身体を異様な不思議なやり方で動かす。ダンスが頂点に達したとき、たくさんの楽器をいちどきに鳴らしたような大音響がおこる。するとすぐに魔女も地獄もすっかり消え失せて、その代りに、燦然と輝く名声の館 (House of Fame) が現われる。この後がマスク・プロパーとなる。テキスト全体は、序文や、中途につけられた説明文も含めて534行あり、そのうちアンティ・マスクの部分は336行、つまり全体の約63%をも占めている。しかし、マスク・プロパーの中にはダンスが4回あり、そのうちの1つは約1時間ぐらい続くと明記されていることから考えて、他のダンスは、30分以下しか続かなかったとしても、アンティマスクよりもマスクの部分に要する時間の方が圧倒的に長かったであろうと察せられる。また、マスクダンスはあるプロットの一部として行われるわけだから、そのプロットを観客に知らせる説明のスピーチ、あるいは対話、歌などがテキストに現われる部分である。一方、ジョンソンのアンティマスクはダンスを含むことが多いものの、一般的に滑稽味を多分に含むドラマの形式をとることが多い。その結果、当然、せりふの部分が多くなる。テキストの上ではアンティマスクが大きな割合を占めているが、所要時間は圧倒的にマスク・プロパーの方が長かったであろう。さらに、1,000人ほどの観客がマスクーとともにダンスに参加するマスクダンスに比べれば、アンティマスクダンスは、マスクダンスよりはるかに短い時間内におさめられていることであろう。アンティマスクダンスは荘重というより、滑稽味が強調されることが多いのであるから、烈しくまた速いテンポのダンスが短時間のうちに繰りひろげられることが多かったのではないだろうか。また、アンティマスクはすべてプロフェッショナルの俳優が演じるのに対して、マスクは王族を含む宮廷人が演じるのであるから、マスクの方がはるかに重要なものと考えられていたことはたしかであろう。しかしながら、他の多くのジョンソンのマスク同様、この作品においても、アンティマスクとマスク・プロパーのあいだには、明白な対称性がある。アンティマスクの魔女12人に対して、マスクーも12人。夜の闇の中に集^{つど}って、今宵の輝かしい催しをだいなしにしようとする魔女の集会对して、光輝く名声の館に集まる、美德を具現する古代の女王たち。アン王妃の演ずる大洋の女王 (Queen of the Ocean) の他の11人のマスクーは、美德の誉の高かった昔の女王たちである。彼女たちは、いま、名声の館に住んでいる。すなわち、天国を思わせる所に、かつて女王であった人々の精霊が集まっているのに対して、地獄から飛出してきた魔女たちが配される。同一の人数、夜と昼、天国と地獄という設定のしかたに限って言えば、アンティマスクとマスクは対等の位置にある。身軽で、軽快な動きの得意な王妃は、たびたびみずからマスクーとなって出演し、ジェームズ王もそれを楽しんで見たらしい。その王妃のすばらしさをきわだたせるという注文どおりの効果をもたらすのに、この魔女たちの奇妙な雰囲気は十分に役に立ったことだろう。また、悲劇よりは喜劇をつくる才能に恵まれていたジョンソンにとって、コミカル・ドラマの形式をとるアンティマスクは、腕をふるいやすい部分であった。彼は序の中で、王妃のマスクをつくるのはこれで3回目になると述べている。これにより、前2回のマスクは好評であったと察せられる。3回も依頼されるということは、もうすでにある種の評価を得ているということを示しているし、また今後も依頼さ

れる自信もあったのだろう。とくに『女王のマスク』の出来については、ジョンソン自身満足しているようだ。魔女たちがつどった目的を観客に知らせるために質問と答という対話の形を用いたこと、もし、この形をとらず、一人一人が出てきては自己紹介したり、登場した目的を述べる形をとったなら、さぞかし退屈であろうとテキストの中の説明文で述べて、自己の作劇術を自画自讃している風がある。ついでに数年前の、不評だったサミュエル・ダニエルの長い説明つきのマスクを皮肉っているかもしれない。事実、その翌年から、宮廷のマスクの大半はジョンソンに依頼されることになった。

『女王のマスク』の全体像を知るために、ここでマスク・プロパーの部分の概略を記そう。地獄の場面が一瞬にして消えさると、あとには、栄光に満ちた壮大な名声の館が現われる。上下の舞台を利用した、2階建ての館である。2階の部分に12人のマスクがピラミッド型に配された玉座にかけており、そのまわりには、さまざまな美しい色の灯がついている。そこから、英雄の、男性らしい美德を表わす「雄々しい美德」(Heroic Virtue)が降りてきて、77行にわたる説明のスピーチを行う。名声の館が現われる前におきた大音響を聞き、美德をまのあたりに見ただけで、魔女たちは逃げてしまったこと、武器を用いる必要はなかったことが語られる。さらに、名声の館のすばらしい構造や、女王たちがどこの国の人であったかを観客に知らせる。女王たちが享受した名誉をイギリスの王妃に与えたいと思っていること、それを喜んで受けた王妃が、名誉を与えてくれた女王たちの姿を今宵、観客に見せようと思っていること、名声の館の女王たちは、とくに王と宮廷の前にその美德の姿を現わすのだと述べる。ここで回転じかけの機械が動いて、マスクは舞台裏へと消えると同時に同じ場所に「名声」(Fame)が現われる。白い服、白い翼、首のカラーは金色、カラーからは心臓(りっぱな名声を象徴する)を下げている。右手にトランペット、左手にオリーブの小枝を持つ。足は地に頭は雲の中にある。機械が回転するあいだ響いていた音楽がやむと「名声」(Fame)は「美德」(Virtue)に呼びかける。「わたしがこれからしようとすることに力を貸して下さい」と。それから、女王たちを自分の車(chariot)に乗せ、自分に仕える鳥や動物に車を引かせるのだと告げる。大きな音で音楽が奏せられているあいだに、マスクたちは下へ降りてくる。そして3台の車に分乗する。はじめの車には4人マスクが乗っていて、鷹が車を引いている。4人のたいまつ持ちが車の横につき、縛られた魔女4人が車の前をゆく。2台目の車はグリフィンが引き、たいまつ持ちと他の4人の魔女がつく。最後の車はライオンが引くりっぱな車でこれに王妃が乗っている。たいまつ持ちは、王妃のために6人余計につき、同数の魔女がつく。このあと勝利の音楽の響きわたるなか、歌も歌われる。そのかん、3台の車が舞台の上をゆっくりとゆききしている。すばらしい光景、美德の結果生まれる名声は広くかつ長く伝わるのが歌われたあと、マスクは車から降りて、コルネットにあわせて1回目のダンスをする。すぐに続けて2回目のダンスがバイオリンの伴奏によって行われる。いずれも変化に富んだ、複雑で精妙なダンスである。このうち、マスクは観客の男性を誘ってゆっくりしたダンスを1時間ほど踊る⁽¹⁵⁾。踊ったあとの休息の時間をとるため、テナーの歌手が妃をほめる歌を歌う。そのうち、3回目のダンス。数多くの変化に富んだダンスで、やがてそれは、第2王子チャールズをたたえる人文字をつくってゆく。このときはバランスのとれた動きをする。その後2種類の早いダンスがあり、さいごにエレガントなダンスで終る。このうちマスクは再び車に乗り、舞台を意気場々と乗りまわしてから名声の館に戻る。そのあいだ、歌声が流れる。「昔の人々は亡くなくても、その名声は永遠に絶えることがない」と。

(6)

『女王のマスク』の全体像を確認したので、次に民間の祭との共通項および異なる点を確認する。「今

宵の輝かしい催しをだいなしに」するために集ったアンティマスキの魔女たちは、木々を枯らせて作物をとれなくする冬の悪霊に相当する役を演じている。王妃に名誉を与えるために登場したマスキ、昔の王女たちは、人々に豊穡を約束し、祝福を与える春の善霊、神の役柄だ。悪魔を追い払い、神々を案内して導き入れる「りっぱな名声」(good Fame)は、神や悪魔と交流することのできる強い霊的力を持つ人、つまり、呪術師、坐女、司祭役である。その「名声」の仕事に手を貸す「雄々しい美德」(Heroic Virtue)は、「名声」と同じ役割をもつが、いっそう霊的力の強い人と考えて良いだろう。悪を追い払って神を導き入れて祝福を受けるといった形をとっている点では、『女王のマスキ』は民間の祭りと同様と同じ形式である。「有徳であった人々が、名誉ある真正の名声を得ていることをほめたたえる」⁽¹⁶⁾ ことがこのマスキのテーマである。「名声」と「雄々しい美德」という抽象名詞の名を持つ2人の登場人物は、むしろ神に相当すると思われるが、ここでは、マスキを呼び出して車に乗せてねり歩かせる、司祭役、演出家の役割しか与えられていないのは、*Hymenaei*におけるハイメンと似ている。また、昔の女王たちは、いまは精霊であるとしても、かつては人間であったのに、その神ならぬ女王たちが王族や宮廷に名誉を与えに来た(祝福を与えにきた)という形は、祭りの形と異なるように思える⁽¹⁷⁾。マスキの最後の部分ではダンスとダンスの合間をぬって3つの歌が歌われる。1番目と3番目の歌は名声、美德をほめたたえる歌、2番目の歌は王妃アンをほめる歌となっている。つまり名声をたたえるのにはほぼ同じ重さでアン王妃の美德がたたえられる。祭りでは、直接生死にかかわる問題、食糧の確保を祈ることが目的であるのに対して、このマスキでは、名誉という抽象的な美德が永遠に称えられることを祈る。昔の女王たちが神の役割になうこと、およびさいごから2つ目の歌で王妃がたたえられること、は宮廷で演じられるという事情により、祭りの形式に変更が加えられたと見ることができる。家臣たちは王や王妃の恵み、祝福のもとにあるという表敬(Flattery)であろう。古代の女王たちは王妃に名誉を与えにきた。同時に、古代の女王を演ずるマスキたちは、マスキダンスの折に、観客の中へ入ってゆき、観客とともに踊る。これは、人々に広く祝福を与える形と共通する行動である⁽¹⁸⁾。宝石や豪華な衣装できらびやかに、そして異国風に着飾った、かなり高い身分の貴族(マスキ)が観客のもとに降りてきてもダンスをするとき、観客は、自分たちよりも一段と高いもの、一段と魅力あるものに直接触れる感じがするであろう。そこには、人々が司祭たちの手によって祝福されるときと一種共通の感覚があるかもしれない。けれども、二者のあいだには、やはり世俗的と宗教的という差異が存在する。人々の胸の裡に似たような感激が湧くとしても、一方には宗教的畏敬の感激が欠けていると予想される⁽¹⁹⁾。たいまつは、以前のマスキ同様、照明に用いられているようだ。マスキの中心となる王妃のまわりには、他のマスキより多人数のたいまつ持ちがつきそって、ヒロインを一段と明るい光の中に浮き上がらせている。

Hymenaei の中で行われる模擬試合(Barries)のときと同じく、悪と善の「戦い」はなく、善のきざしがあること、善が到来することがすぐ悪の徹底的敗北につながる。また、一般的に祭るとき、悪魔は追放、処刑されて姿を消すことが多いが、ここでは、マスキ・プロパーの中で、魔女たちは縛られているので本人(魔女)の意志に反した形ではあっても、車に付き添う役、すなわち、神の活動を助ける形をとっている⁽²⁰⁾。アンティマスキ、の行われる場所は地獄で、マスキ・プロパーの行われる場所は天国を思わせる所に設定してあるという事実は、祭りの行事が、霊の集まる所(神殿、墓など)で行われることと関係があると思われる。前回述べたように、祭りは同じ形式をくり返すところに意義があるのに対して、マスキでは新しい演出をもちこむことが必須の条件の1つである。そのためには、当然、時代の風潮、嗜好をとり入れることとなろう。このころ、古い例に学ぶこと——昔の偉人たちがなした業績にならって、現在生きてゆく指標とすること——が好まれた

ようである。古い時代の烈女のはまれ高い女王たちをマスクーとしてズラリと並べているのは、上のような好みを満足させたことであろう⁽²¹⁾。また、中心となるマスクーの持つ雰囲気をよく生かすような構成となるよう十分注意が払われたにちがいない⁽²²⁾。

アンティマスクにおける魔女たちの行為は祭りの儀式と類似した形をとっている。しかし、それは、神を追い出し、悪霊をふき入れるという、常とは逆の目的のために行われる。魔女たちは、彼女らにふさわしい手草を持っている。そして呪いの文句をとえながら、大地が汗ばむまで、毒蛇を大地に叩きつける。決して葉をつけることのない枝で大気を打つ、明かるい光に向かって毒葉を投げつける、さびたナイフで自らの腕を刺し、血がしたたるあいだまじないをとえながらという行為をし、こうして、世界も自然も打ちすえて死なせようとする。大気や大地を打つことは、祭りに見られる行為で、大気や地中から悪霊を追い出すと同時に、大地の神にめざめてもらって豊穡をさずけてもらうために行われる。祭りにおいては、生命を象徴するもの、ないしは神の依りしろとして緑の枝がよく使われるが、ここでは葉をつけることのない枝、おそらくは枯枝が用いられる。このように、魔女の目的も手草も、祭りのそれを裏返しにした形をとっている。なお、魔女たちの手草(毒蛇、骨、草、根など)および、魔術でひきおこすことのできる事柄については、古典およびそれ以降の書物に拠っていることをジョンソンは説明文の中で明記している。そこにはホメロス、ウェルギリウス、オウィディウスなど12人の作家たちの名とその書名がつらねてあり、さらに別にアペンディクスの20頁の注のうち、アンティマスクについて14頁にわたる注がついている⁽²³⁾。そして、もしこの注に誤りがあれば、その責任はわたくしにあると見栄をきっているところを見ると、相当綿密に調べて、自信を持っているのだろう。

前回にならって登場と退場の型を見ると、アンティマスクーは地獄から現われ、「名声」の登場とともに地獄へ逃げ帰る。アンティマスクーだけに範囲を限って見れば「往復型の旅行」をしている。しかし、マスク・プロパーで、捕われの身となって再び姿を現わすので、全体から見れば、「往復型」となる。一度地獄へ逃げ帰ったものの、最終的には舞台にとどまる形をとっているのだから、単純化して考えれば、*Blackness* と *Beauty* を1つの作品として考えたときと同様、「片道型の旅行」となる。マスクーたちは「名声」の力によって宮廷に姿を現わした精霊である。それは祭りにおける神と同じように、人々に祝福を与えたのち、「名声の館」へ帰ってゆく、「往復型の旅行」をしている。

(7)

ここでは舞台の構造について説明を加え、その舞台をつくったイニゴー・ジョーンズについて少しふれておこう。

下の図1⁽²⁴⁾に示したのは、『ヘンリー王子の模擬試合』の折に、迎賓ホールにしつらえられた舞台や客席の見取図である。上方Cは舞台、その正面にあたるAは国王の席、Eは舞台を三方から囲む形に作られた階段式に段差のついた観客席。Bは試合のために用意された控え用のテント、Dは挑戦者が向かいあうときのしきりである。通常、マスクーはCの舞台上で演じる。Cの前に同心円状に広がる3つの弧は、舞台からホールへ降りる階段であろう。マスクーはこの階段を降りてゆき、Eの座席からは観客が降りて、両者はDのあたりを中心とするホールでまざりあって、ホール全体にダンスをくりひろげる。図2⁽²⁵⁾は、マスクーの舞台上から見下した形の見取図である。下方Aは舞台から、ホールへ降りる階段、左右相称に並ぶ3本の短い棒Cは、中心となる舞台背景の左右を縁どる形で用いられる背景、たとえば、岩にとり囲まれた中に宮殿がある場合、宮殿の左右に配される岩の絵が描かれているサイド・ウィング(Side wings)である。その上のFも舞台背景で、中心部の切れた2本の棒のように描いてある。これは、舞台の上に敷居のような形で溝がついてあり、そ

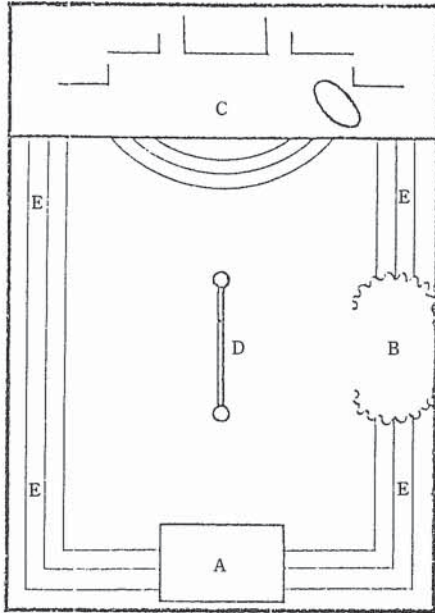


図 1

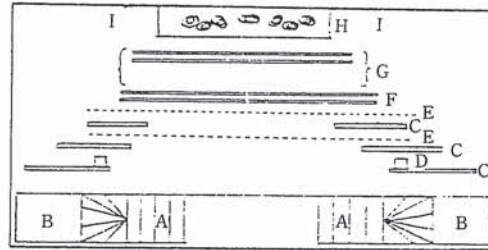


図 2

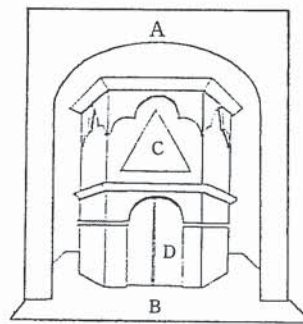


図 3

の上のふすまを引く形で、背景を一気に変えてしまうための装置だ。『女王のマスク』で、地獄のシーンが一瞬のうちに消えてなくなり、地獄を思わせるものはあとかたもなくなるという設定は、この、ふすまを引く方式による背景転換が行われるわけで、Fの後にあるGにあたる部分に「名声の館」の背景がしつらえられていることになる。Gのさらにうしろにマスカーが待機している。急速な舞台転換に使われる装置は主としてこのふすま方式と、さらにもうひとつ、回転式のものがある。図3⁽²⁶⁾は「名声の館」の図である。Aは張り出しているアーチ、Bが舞台、Cが回転仕掛の機械で、はじめはここに、ピラミッド型に配された座席に12人のマスカーが座っているのだが、やがてこの三角形の席はゆっくり回転してマスカーは姿を消し、その裏から「名声」が現われる。マスカーは観客にいったん姿を見せてから舞台裏へ入り、「名声」が語っているあいだに下の舞台へ降りて、車に乗る準備をする。文楽で浄瑠璃を語る大夫が交代するとき、その席がぐるりと180度回転して、その裏から次の大夫が現われる仕掛けがあるが、あのイメージで良いのだと思う。ただしCの部分は2階舞台であるし、12人ものマスカーを乗せる席であるから、文楽に比べればずいぶん大がかりな機械であろう。Dは一階舞台にある観音開きの扉で、ここから車(chariots)が出てくる。2階式の舞台はたびたび使われたようだ。『女王のマスク』では、1階舞台と2階舞台のしきりは、館の屋根でかくされていたのであろう。

マスク・プロパーに登場する「名声」は白い服を着て翼があり、首には黄金のカラーをつけ、カラーには心臓^{ハート}を下げています。このいでたちは、Cesare Ripaの*Iconologia* および Orus Apolloの*Hieroglyphia*に拠っていると説明文の中にジョンソンは書いている。さらに左手にはトランペット、右手にはオリーブの枝を持っている。この2つの持物については典拠が示されていない。オリーブの枝は魔女の持つ枯枝と対照的なもので、冬に対して春を示す持物である。トランペットは、精霊を呼び出す音楽として用いられるのだろうが、当代風のものであるように思われる。ウェルギリウ

スの記述どおり、「名声」の足は地に、頭は雲の中にある。マスクーたちの住む「名声の館」(House of Fame) について作者は、それがジョーンズの手になることを明記した上で、説明文の中でくわしく描写している。まず、建物を支える一階の柱は、ホメロス、ウェルギリウスなど第一級の詩人の柱像である。これは、名声が、こうした詩人たちの称讃のことばによって支えられることを示している。2階の柱は、アキレス、イーネアス、シーザーなど、ホメロスたちが称讃した偉大な英雄たちの柱像である。これらの柱はすべて、重量感のある金色の柱である。柱と柱の間、柱の下には、陸、海のいくさのようすや、勝利、愛、犠牲など、名誉の主題となるあらゆる行為が真ちゅうの上に型どられてあり、その上に銀色をぬりこめて美しく輝いている。この「名声の館」のつくりは、チョーサーの「名声の館」1184行以下の記述に従っているとジョーンズが述べているようだ。2階にマスクーが配されているが、その上には「名誉」と「美德」の姿を連ねたアーチがかかっている。1階と2階のフリーズ(小壁)には、エメラルド色、ルビー色、サファイア色、紅玉色など、宝石の光輝を模したライトがびっしり連ねてある。この美しい光と建物の中から発せられる光が、マスクーの衣装に反射して、実に輝かしい光景となっている。ここでは、神が人間に与える神々しさや畏怖よりも絵画的美しさが強調されている。観客は豊かな色彩の華麗な雰囲気の中に陶然として浸ったことだろう。また、マスクーは「名声」の車に乗って舞台をねり歩くが、この車(chariot)は祭りの折に神を乗せてゆく乗物、神輿に相当する、古典的装いの車であろうか。マスクー上演の記録を読むと、マスクーの内容についてはほとんど何も記されていない場合でも、マスクーとたいまつ持ちの服装の種類と色に関しては、記してあるものが多い。それによれば、たいまつ持ちの服装は、マスクーの服装とコントラストをなしてマスクーを映えさせるか、ないしは同系統の色を配して、ハーモニーを強調したようである。いずれにしても、たいまつ持ちの着る衣装とたいまつ持の明かりの両方により、マスクーを引き立たせる役割を果たしていることがわかる。車を引くのは鷹、グリフィン、ライオンである。鷹はローマ帝国の軍旗に描かれていたし、ライオンは大英帝国の象徴である。グリフィンは、ライオンと鷹の混合した形である。王妃はライオンが引く車に乗っている。英国は、ローマ帝国をあわせたほどの力を持つという意味だろうか。ここでは神をおそれる気持、祝福を待つ気持とはだいぶかけ離れて、自分自身の力を誇示しているように見える。このような動物の象徴的な用い方を見れば、世俗的な印象を意図的に与えようとしていると考えるもさしつかえないであろう。アンティマスクーの魔女たちは、マスクー・プロパーでは、縛られて、車の前を歩く。これは、マスクーたちの力を示すと同時に、その対照性によりマスクーたちの引立て役とも、飾りともなっている。いいかえれば、マスクー・プロパーの中に入ってマスクーを盛りあげてゆく力、マスクーを支える立場をとっているとも言える。祭りの場合と異なり、冬の神に相当する魔女が、さいごまで舞台にとどまっている。これもたいまつ持ちの場合と同様、ドラマティックな効果をねらった結果であろう。

付記 本稿は1983年11月5日、「大妻英文学談話会」で発表したものに加筆修正した。

注

- (14) *The Masque of Queens*, ll. 9-12.
- (15) マスクーは12人である。マスクーに誘われなかった大多数の観客は、それぞれ男女のペアを組んで、フロアで一緒に踊るのであろう。
- (16) *The Masque of Queens*, l. 6.
- (17) 日本の祭りでは、祖先の霊が善霊となって豊作をもたらし、人々に祝福を与えるためにやってくるという形がある。西欧にもそれに類する形があるかもしれない。その場合、過去の精霊が神の役を演ずるのは、祭

- りの形式をふんでいると考えられる。
- (18) 神の霊のついた枝を人々の身体に触れることにより、神の祝福が与えられる。つまり霊的力を持つ人ないしはその人の持つ神の依りしろに触れることが神との接触を意味する。ローマ法王が人々に祝福を与えるとき、人々の額や頭に手を触れるのも同じ考え方であると思う。
 - (19) 王妃や貴族の夫人たちが精霊の役を演じているが、彼らが舞台上にいたことが、彼らの現実世界におけるアイデンティティゆえに、十分なドラマティック・アクションとなり得ているとスティーブン・オーゲルは『ジョンソンのマスク』(1965)の中で語っている。
 - (20) 『オベロン』(1611)では、この形が一段と進められている。つまり、アンティマスカーは、はじめからマスカーに仕える希望を持っており、マスク・プロパーの中で、その希望は達成される。
 - (21) 『ヘンリー王子の試合』(1610)でも、アーサー王から当代のジェームズ王にいたる英国王たちの業績を202行にわたって語るせりふがある。
 - (22) この点については、大妻英文学談話会の席上、田中英史氏の御指摘により、注意を喚起された。アン王妃はかなり活発な人であったらしい。アマゾンの女王をはじめ、勇猛な女王たちを並べることは、王妃の持味を発揮させるのに役立ったかもしれない。また、フェンシングが大好きで、また上手でもあったヘンリー王子のために作られたマスクでは、中世騎士道の物語が展開されてゆく。
 - (23) ちなみに『ヘンリー王子の試合』(1610)と『無知と愚行から解き放たれたキュービッド』(1611)にはアベンディクスはまったくついていない。『オベロン』(1611)には3頁のアベンディクスがついているのみである。
 - (24) Stephen Orgel and Roy strong, *Inigo Jones* (1973), vol. 1, p. 167.
 - (25) *op. cit.*, vol. 1, p. 325.
 - (26) *op. cit.*, vol. 1, p. 138.